

問わず語りの 人間力原論

高見大介



子どもの頃のまなざし

代休をもらったが、何をしてよいかわからない。似た経験をしたことがある人も少なくないのではないかな。僕もその一人だ。

「コロナ禍で時間の使い方が難しくなったから」と心で言い訳をしつつも、普段から学生に「指示を待つだけの人生はつまらない」と偉そうに説いている

だけに、情けない話だ。何となく近所の公園をジョギングしてみようと思い付き、出かけた。軽く走った後に休憩していると、小学校中学年くらいの男の子たちが自転車に乗って集まってきた。

彼らは前カゴにカラフルな水筒を入れ、野球帽をかぶり、頬をつたう汗を拭きながら今日一日の冒険の相談を始めた。「セミを取りに行こう」「いや、今日はザリガニ釣りをしたい」など、やりたいことが山のようにあるらしい。なんと心の洗われ光景なのだろう。この懐かしい風景に、何だか僕までうれし

くてワクワクしてきた。

僕らの子どもの頃と比べると、社会の様子は大きく変わってきている。勉強や習い事が増え、芸能人のようなスケジュールをこなしている子どもたちも多いと聞く。また気候変動での熱中症の予防や感染症対策など、昔では考えられないほどやることが多くなっているのが現状だ。僕が子どもなら愚痴の一つや二つをこぼしていると思うが、彼らの目は好奇心に満ちあふれ、美しく輝いているではないか。

そんなことを考えながら彼らを眺めていると、やることが決

まったらしく、公園の森の中へ消えていった。その後ろ姿に「おじさん、俺らは決まったぜ。おじさんは何がしたいんだい？」と言われたような気がした。子どもの頃に子どもらしい体験をすることで、大人らしい大人になることができるんだ。頼もしい彼らを無言で見送り、付けていたイヤホンを外して、セミの声を聞きながらジョギングを再開した。目を、耳を、もっと外へ向けよう。おじさんだって、まだまだ冒険はできる。

たかみ・だいすけ 日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。41歳。